

利用案内

展示室での閲覧は自由です。閲覧室での閲覧は下記に従って下さい。

・閲覧の方法

1. 閲覧を希望される方は、備え付けの文書目録によって必要な文書を検索し、閲覧票に記入して館員に請求して下さい。
2. 閲覧は特別の指示がある場合を除いて、閲覧室で行って下さい。
3. 閲覧に際しては、鉛筆以外の筆記具を使用しないで下さい。また文書の亡失・毀損・汚損のないように注意して下さい。
4. 閲覧を終了された方は、文書を点検のうえ、館員に返却して下さい。

・文書の複写

文書の複写を希望される方は所定の申請書を提出し、許可を受けて下さい。
複写はカメラを使用し、ご自身で撮影して下さい。

・閲覧時間

平 日 9:30~16:30
土曜日 9:30~12:00

・休館日

1. 日曜日および国民の祝日に関する法律に規定する休日
2. 学習院開院記念日 (10月18日)
3. 学習院大学開学記念日 (5月15日)
4. 学習院大学入学試験日およびその翌日
5. 長期休業（夏期休暇、年末年始の休暇）に伴う休館および業務（展示替えなど）に必要な休館はあらかじめ明示します。
6. 館長が必要と認めるときは臨時に休館することがあります。

第八回特別展

新収資料展

1988. 11. 1 (火) ~ 11. 30 (水)

学習院大学史料館

本年度の特別展は、「新収資料展」と題し、フランス文学科教授で小説家の辻邦生氏の自筆原稿類、哲学科教授秋山光和氏所蔵の日記、古文書など、経済学科教授島野卓爾氏よりご紹介いただいた下館藩家老牧家文書、女子短期大学教授高橋新太郎氏よりご寄贈の戦前の新聞号外、前館長金澤誠氏よりご寄贈の三好達治自筆原稿を展示いたしました。

これらの展示を通して史料館の活動にご理解をいただければ幸いでございます。

昭和63年11月

学習院大学史料館

館長 棚田節子

秋山光和家文書

本学哲学科教授で東洋美術史家の秋山光和家に伝わる秋山和光（和厚）
・光條の日記と古文書類である。幕末から明治初期にかけての日記、海外
への関心を示す史料、江戸町奉行所の職務に必要なことの書留帳などが伝
来している。幕末の一武士の活動が明らかになるとともに、当時の社会情
勢の一端を知ることができる。

1. 秋山和光・光條日記

安政元年（1854）から明治9年（1876）までのうち20年間（明治6年／1873～8年／1875欠）、全18冊にわたる日記。

和光・光條は江戸町奉行所の書物役などをつとめた。和光は文政7年（1824）7歳で家督をつぎ、翌年元服し、天保14年（1843）には日光参詣御用掛に任じられるなど臨時の分掌をもつとめた。文久4年（1864）には年寄役に至り、致仕した。光條は、安政元年（1854）に見習となり、文久元年（1861）には臨時の分掌の外国御用掛をつとめた。海外への関心が深いと同時に、国学の素養も深く、その後、明治政府のもとでは、神祇官に出仕し、寒川神社権宮司、出雲大社小宮司、三島神社宮司、京都八坂神社宮司などを歴任した。

日記は、月日・天候を記し記事は箇条書きである。反故紙を利用している部分も多いので、その紙背の内容にも注目される。

2. 昔物語（秋山家年譜）

文政元年（1818）から明治35年（1902）年に渡る秋山和光・光條・光夫の活動を中心とした年譜であるが、和光・光條・光夫以外にも妻子兄弟姉妹についての記述もみられる。本品は、ページの上の部分に年号、和光の年齢（和光没後は光條の年齢）が記され、1ページあたり2か年分を書いているが、明治元年（1868）は2ページ、2年は1ページを費やしている。光條逝去記事は息子の光夫によりインクで書き込まれている。

3. 海外地名早見（世界地名抜書き）

『采覧異言』『地理全志』『瀛環志略』などから、世界各地の地名について、読み方、漢字の当て字などについての記述を書き抜いたもの。光條は外国御用掛に任じられるほどの人物だったので、おそらく海外に対する関心も高かったのだろう。

4. 魯西亞国事情

高島久也が筆記したものを、秋山光條が校閲したものであることが見開き扉からわかる。跋文によれば、高島久也の各国航海の経験を生かして、外国の国勢、俚俗、風土の事物を書き記しておいたものを、光條が平易な言葉に直し、さらに、画を久也が挿入したものである。明治5年（1872）10月刊。高島久也は、名を祐啓とも烈ともいい、文久元年（1861）から3年（1863）にわたり『歐西紀行』、文久3年（1863）に『軍陣救急便方』を著し、『泰西物産考』を編纂した人物である。

5. 西洋人名帳（世界人名辞書）

「西洋人名帳」と題されるが、西洋、東洋を問わず海外の人名を五十音順に配列し、読み方、漢字の当て字などを示している。「出雲大社」の墨紙に書かれているため、光條の出雲大社小宮司の歴任期間（明治8年／1875～明治13年／1880）に作成されたものと思われる。

6. 江戸八丁堀細見絵図（複刻）

江戸八丁堀（現在の中央区日本橋茅場町）の細見切絵図（複刻）で文久2年（1818）金鑄堂尾張屋清七板とある。秋山家は、「火の見櫓下角屋敷の秋山」と通称され、画面の中央に見られる。文久2年は、和光（常次郎）と光條（小太郎）が家督を交代した時期にあたるので名前が併記されているのだろう。

（参考）江戸一目図

東方より江戸を一望している木版画である。薄い彩色が施されており、画面手前に墨田川、上部に相州大山・富士山、中央に日本橋、右方に神田川を描いてい

る。地名が所々に小さく書きこまれている。俯瞰的な画面構成を持ち、従来の「洛中洛外図」的な画面構成と異なるものとして興味深いものがある。描かれている土地が江戸の名所旧跡といかなる関連を持つのか、「江戸名所図絵」の発達の系譜から考えたらいかに位置付けられるかなどの課題を考える上で大変興味深い。「文化6己巳年紹真（方朱文印「紹真」）」をもつ紙本着色の六曲一雙の屏風が津山市立郷土博物館に所蔵されている。本品は翌文化7年に屏風をもとに木版としたものの複物であろう。「江戸錦形紹真筆、野代柳湖刻」とある。

作者北尾政美（明和元年／1764～文政7年／1824 錦形蕙斎と号す）は、本姓を赤羽氏、名は紹真、字は子景、俗称三二郎、江戸の疊屋の子として生まれ、北尾重政の門に入り、初め三二郎の名で十七歳のとき黄表紙の挿絵を描き、翌年重政より政美の名をもらう。天明半ば頃より錦絵を描きはじめるが、美人画は少なく、武者絵、浮絵、鳥瞰図、略画、花鳥画を手がけた、寛政6年（1794）には津山藩のお抱え絵師となり、名を錦形蕙斎紹真と改めた。そして藩主の命により狩野養川院惟信について狩野派を学び、以後浮世絵からはなれ、肉筆画と略画式絵本に専念、また古今の大和絵や琳派など幅広い分野にわたって研鑽をつんだ。彼の画法の特色として略画法と呼ばれる独特の筆法があり、これは『蕙斎略画苑』や『近世職人尽絵詞』などによって知られるが、簡略な筆致のなかにいきいきと人物を描き出すさまは、他の追随を許さぬものがある。（参考文献 『東京都庭園美術館資料第14輯 回想の江戸・東京 II』）

常陸国下館藩家老牧家文書

牧家文書は、昭和57年10月に本学経済学科教授島野卓爾氏のご紹介により、本学卒業生の江島昭氏、柴谷末雄氏から当館に寄贈されたものである。なお、現当主宅にも若干の史料が所蔵されており、あわせて『常陸国下館藩家老牧家文書目録』として、昭和63年3月に目録を刊行した。

牧家は常陸国下館藩（現茨城県下館市）石川家（2万石）の家老を代々勤めた家である。そのため、藩政にかかる史料が数多く残されている。

藩主との関係、藩政への参与や、武家の素養としての武芸修練、家老家の経済など、様々な面から興味深い史料である。

儀礼の書簡について

牧家文書の特色として、儀礼の書簡類が多量に残されている点をあげることができる。

儀礼書簡の主なものは、牧家より送った年賀、暑中見舞い、寒中見舞いなど時候の挨拶に対する藩主からの答礼、また、家督相続、出産、任官などの祝儀を送ったことに対する藩主からの答礼などである。

藩主である石川家以外からの書簡、たとえば下館石川家の親戚筋にあたる龜山石川家、小田原大久保家、旗本などからの答礼もあり、家老家の儀礼慣行を考えるうえで、貴重な史料といえる。

7. 任官に際し牧正実からの祝儀への石川總陽礼状

（正徳4年）（1713）正月11日 牧家文書330

正徳3年（1713）12月21日石川總陽は従五位下播磨守に任せられた。その際に牧十右衛門（正実）より祝儀を送られたことに対する礼状である。

8. 幕府の命による御城入交代が済み藩主満悦の旨の石川總候書状

8月28日 牧家文書361

石川若狭守總候が、城受取りの役を幕府より仰せ付けられ、その役を果たした際に家老である牧十右衛門（均正）に送った書状である。

9. 石川家の家督相続に際し牧正遼からの祝儀への石川總彈答札

（明和7年）（1770）11月1日 牧家文書381

明和7年（1770）10月13日石川内膳總彈は、父總候の遺領を継ぎ、16歳の若さで藩主となった。その家督相続の際の祝儀に対する礼状である。文書中に見える牧仙藏は牧甚五兵衛正遼のことである。

10. 牧正達からの年賀への石川總般答礼

正月3日 牧家文書388

牧甚五兵衛正達より、五代藩主石川中務總般にあてた年賀状への礼状である。

11. 牧正達からの暑氣見舞いへの石川總相答礼

6月28日 牧家文書453

石川家の分家である旗本石川氏（初め大久保を称す）の当主總相へ、牧仙十郎（正達）が出した暑中見舞いへの礼状である。

12. 牧志摩などからの寒中見舞いへの石川總詮答礼

12月 牧家文書542

石川楨之助總詮へあてた寒中見舞いに対する礼状。牧志摩と用人高木権兵衛への連名となっている。包紙つき

下館藩の財政改革

江戸時代後期の諸藩の課題として、財政の再建があった。下館藩も他藩同様、藩財政が破綻を來たし、天保飢饉後（1836～38）には借金が三万両にものぼっていた。その打開策として、各地の財政建て直しに尽力した二宮尊徳（金次郎）に財政再建を依頼した。（尊徳仕法）

下館藩への仕法については、「二宮尊徳全集」に詳しく、また、御用達商人側の史料としては、「常陸国真壁郡下館町中村兵左衛門文書」（目録は学習院大学史料館発行、昭和54年）があるが、牧家の史料は藩側の史料として注目される。

13. 御趣法勘定土台帳

嘉永7年(1854)3月 牧家文書175

14. 趣法勘定土台帳

嘉永7年(1854) 牧家文書176

15. 御趣法勘定取調帳

慶応2年(1866)12月16日 牧家文書177

幕末維新时期の情勢

慶応4年（1868）1月、戊辰戦争が起り、各地で戦いが繰り広げられた。官軍と幕府軍はともに下館を北総地方における主要地と考え、下館藩主石川總管に味方につくようにと双方が圧力をかけていた。

藩主總管は幕府においては、若年寄兼陸軍總督という要職についていたが、同年2月に辞任し下館へ戻り、情況を見守っていた。度重なる両軍からの参軍の要請に、立場を明白にすることのできなかった總管は、4月、水戸へ逃れてしまった。

牧家文書にはこのような動乱の情勢を、詳細に示す史料が残されている。

16. 建言（藩主の英断をうながす藩士からの建言）

（慶応4年）(1868)6月21日 牧家文書84

下館藩士和田守外より藩主總管あての建言。「王政一新となったのに、殿様は漫然と日々を送ってらっしゃる。どうか官軍の奥羽鎮撫へ加入を願うか、上京し帰順の嘆願を乞うか、英断してほしい」という旨を建言している。

17. 水府御旅館中日記（水戸滞在中の日記）

慶応4年(1868)4月12日～5月晦日 牧家文書82

牧正道が、藩主總管と共に水戸へ逃れていた間の日記。

18. 乍恐以書付申上候（下館藩用人より官軍參謀宛ての藩主上洛容赦申上書）

慶応4年(1868)7月 牧家文書85

下館藩用人富松何右衛門、舟木盛衡より官軍參謀吉村長兵衛あて書簡。官軍よりの藩主總管上京要請に対し、下館藩は今まで官軍に対し、軍資金を出したこと等を述べ、上京は病弱であるから容赦してほしい旨を訴えている。

辻邦生資料

本学フランス文学科教授で小説家辻邦生氏の自筆原稿、「JOURNAL」(日記)をはじめ、執筆資料・手帳・書簡などの寄託を、前館長金澤誠氏のご紹介で1987年より受けている。

辻邦生氏は、1957年より3年半のパリ留学を契機に本格的な執筆活動に入り、1963年『廻廊にて』で近代文学賞、1968年『安土往還記』で芸術選奨新人賞、1972年『背教者ユリアヌス』で毎日芸術賞を受賞。その後『春の戴冠』『時の扉』『樹の声 海の声』『雲の宴』などの長篇および短篇などを数多く発表している。

辻邦生自筆原稿

「雲の宴」「世紀末の美と夢」

当館には『雲の宴』、「世紀末の美と夢」の自筆原稿が、ほぼ完全な形で寄託されている。

『雲の宴』は、女性ジャーナリストを主人公に、ヨーロッパ・アフリカ・東京を舞台として進行し、「愛・生の意味・疎外・暴力」など、日本の現代のさまざまな問題を取りあげている。

『世紀末の美と夢』全6巻は、各巻に「夜ひらく」の統一テーマで、パリ・ウィーンなどの都市を舞台とした世紀末小説が掲載され、その後1冊にまとめられた。

自筆原稿の特色として、原稿を書く前に構想がかなり綿密に練られるため、校正段階の手直しが非常に少ない点が挙げられる。

19. 「雲の宴」(上)(下)

1987年3月、朝日新聞社より刊行。朝日新聞朝刊に1985年9月7日から1987年1月17日にかけて、487回にわたって連載されたものが、上・下2冊にまとめられた。展示してあるページは、それぞれ列品No.20の自筆原稿と対応している。

20. 「雲の宴」自筆原稿

「第1章五月2」(第2回)・「第11章聖域27」(第261回)分の自筆原稿。

21. 「雲の宴」執筆資料

小説の執筆資料2点。執筆に際して収集した資料より、ブルガリアから南アフリカ共和国に対する武器輸出の新聞記事(「Le Matin」)を展示した。また、この記事についてのメモもあわせて展示した。

22. 「雲の宴」構想メモ

小説の構想メモ3点。1点はストーリーの骨組みに関するメモ。他の2点は小説の導入部のあらすじを記したメモ。列品No.19「雲の宴」(上)の展示箇所とも関連する。

23. 「世紀末の美と夢」・「夜ひらく」

『世紀末の美と夢』全6巻は1986年6月から12月にかけて、集英社より刊行。各巻に「夜ひらく」の統一テーマで世紀末を語る連作小説が掲載された。展示してあるページは、それぞれ列品No.24の自筆原稿と対応している。「夜ひらく」はその連作小説を1冊にまとめたもので、1988年3月に同社より刊行された。

24. 「夜ひらく」自筆原稿

「夜ひらく-パリ十月の死の匂い」・「夜ひらく-ウィーン狩人たちの午後の歌」の自筆原稿。この他にもグラスゴウ、ミラノなどの都市を舞台とした世紀末小説が展開された。

辻邦生と旅

「JOURNAL」に見られる主な旅行

小説家辻邦生の執筆活動の中核に旅がある。今回は「JOURNAL」に見られる主な旅行を追ってみた。期間を「JOURNAL」寄託分(1958年5月~1975年10月)とし、海外旅行の主なものを取りあげた。17年半の間にヨーロッパを中心に、北アフリカ・インドなど計15回の旅行に出かけた。

けている。これらの旅が作品に与えた影響は大きいと考えられる。

なお、日記中の旅行は『パリの手記』『モンマルトル日記』『詩への旅詩からの旅』『時の終りへの旅』の中で紹介されているものもある。

25. 「JOURNAL」に見られる主な旅行地図<パネル>

1958年5月6日から1975年10月5日までの17年半にわたる「JOURNAL」(日記)より、主な海外旅行15回を取りあげ、その足跡をパネルにした。主な経由地には都市名をつけた。15回の旅行については表を参照。

番号 旅行先

- ① フランス・イタリア旅行
- ② ギリシア・シチリア旅行
- ③ スペイン・南フランス旅行
- ④ 西ドイツ・スイス・オーストリア旅行
- ⑤ フランスブルターニュ地方一周自動車旅行
- ⑥ イタリア旅行
- ⑦ 西ドイツ旅行
- ⑧ スイス・オーストリア旅行
- ⑨ イギリス旅行
- ⑩ インド旅行
- ⑪ アルジェリア・チュニジア旅行
- ⑫ フランスパリーカンヌ自動車旅行
- ⑬ 西ドイツ旅行
- ⑭ スイス・西ドイツ旅行
- ⑮ イタリア旅行

日程()内は推定

- 1958. 7. 19～1958. 8. 27
- 1959. 8. 21～1959. 9. 13
- 1960. 8. 18～1960. 9. 16
- 1960. 12. 7～1961. 1. 3
- 1969. 4. 9～1969. 4. 12
- 1969. 5. 16～1969. (6. 2)
- 1969. 7. 24～1969. 7. 29
- 1969. 8. 1～1969. 8. 6
- 1973. 8. 14～1973. 8. 23
- 1974. 12. 21～1975. 1. 4
- 1975. 3. 28～1975. 4. 9
- 1975. 7. 16～1975. 7. 26
- 1975. 8. 23～1975. 8. 27
- 1975. 9. 3～1975. 9. 8
- 1975. 9. 19～1975. 10. 3

26. 『パリの手記』・合本『パリの手記』

『パリの手記』全5巻は、1973年7月から1974年4月にかけて、河出書房新社より刊行された。パリ留学中の1957年9月5日から1961年3月3日までの日記である(往復の航海中日記を含む)。その後合本が出版された。

27. 「JOURNAL」

本館には1958年5月6日から1975年10月5日にわたる17年半分、計54冊の「JOURNAL」(日記)が寄託されている。「絶えず書く」ことを自らに課した辻邦生にとって、日記を書くということは「自分で漠然と空想したり、瞬間に感じた情感をそのまま放置したりするのではなく、そうしたものを、明確な形にしながら、自分の外へ出そう」という作業の連続であり、文学追求の手段でもあった。

28. フランス シャルトル大聖堂スケッチ

シャルトル大聖堂の外観とステンドグラスのスケッチ。「折々の情感、気分を定着するのに<图形化>は有効な手段であり、文章で書ききれなかったものを補足したい」と思うときによくスケッチしたという。絵画的天分にも恵まれ、物をみて適確な表現をすることへの才能を物語る。

29. 手帳

1958年7月19日から8月27日にかけてのフランス・イタリア旅行(旅行①～以下旅行番号については、列品No.25「JOURNAL」に見られる主な旅行地図の表を参照)の際の手帳。展示してあるページは、フランスを旅行中に書かれた。

30. 手帳

1958年7月19日から8月27日にかけてのフランス・イタリア旅行(旅行①)のうち、後半のイタリア旅行の際の手帳。展示してあるページはイタリア旅行中に書かれた。

31. 「JOURNAL」2

1958年5月6日から1959年8月21日までの日記。日記には1958年7月19日から8月27日にかけてのフランス・イタリア旅行(旅行①)の記載がある。展示してあるページはフランスを旅行中に書かれた。(地名については列品No.25の「JOURNAL」に見られる主な旅行地図を参照。)なお、「JOURNAL」2は「パリの手記Ⅱ・Ⅲ」として刊行された。

32. 手帳

1959年8月21日から9月13日にかけてのギリシア・シチリア旅行（旅行②）の際の手帳。展示してあるページは、ギリシアを旅行中に書かれた。

33. 手帳

1959年8月21日から9月13日にかけてのギリシア・シチリア旅行（旅行②）のうち、後半のシチリア旅行の際の手帳。展示してあるページは、シチリア旅行中に書かれた。

34. 「JOURNAL」3

1959年8月22日から1960年8月15日までの日記。日記には1959年8月21日から9月13日にかけてのギリシア・シチリア旅行（旅行②）の記載がある。展示してあるページはギリシアを旅行中に書かれた。なお、「JOURNAL」3は『パリの手記IV』として刊行された。

35. 手帳

1960年8月18日から9月16日にかけてのスペイン・南フランス旅行（旅行③）の際の手帳。展示してあるページは、スペインを旅行中に書かれた。

36. 手帳

1960年12月7日から1961年1月3日にかけての西ドイツ・スイス・オーストリア旅行（旅行④）の際の手帳。展示してあるページは、西ドイツ・オーストリアを旅行中に書かれた。

37. 「JOURNAL」4

1960年8月16日から1961年8月14日までの日記。日記には1960年8月18日から9月16日にかけてのスペイン・南フランス旅行（旅行③）、1960年12月7日から1961年1月3日にかけての西ドイツ・スイス・オーストリア旅行（旅行④）の記載がある。展示してあるページはスペインを旅行中に書かれた。なお、「JOURNAL」4のうち1961年3月3日までは、『パリの手記V』として刊行された。

38. 「モンマルトル日記」・「詩への旅 詩からの旅」

『モンマルトル日記』は1974年5月、集英社より刊行され。2度目のパリ留学（1968年8月～1969年9月）中の日記より、『嵯峨野明月記』の後編を構想し、『背教者ユリアヌス』を書き始めるに至った過程を示す部分を抜粋したもの。

『詩への旅 詩からの旅』は1974年12月、筑摩書房より刊行。旅を主題としたエッセイ集である。展示してあるページは、1973年8月14日から8月23日にかけてのイギリス旅行（旅行⑨）中の記事である。

39. 「JOURNAL」47

1968年10月11日から1969年4月30日までの日記。日記には1969年4月9日から4月12日にかけてのフランスブルターニュ地方一周自動車旅行（旅行⑤）の記載がある。展示してあるページはこの旅行について旅行より戻って書かれた箇所である。なお、「JOURNAL」47のうち1968年10月14日から1969年4月30日までは、『モンマルトル日記』に収載されている。

40. 「JOURNAL」48

1969年5月1日から1970年6月26日までの日記。日記には1969年5月16日から6月2日（推定）にかけてのイタリア旅行（旅行⑥）、1969年7月24日から7月29日にかけての西ドイツ旅行（旅行⑦）、1969年8月1日から8月6日にかけてのスイス・オーストリア旅行（旅行⑧）の記載がある。展示してあるページはイタリアを旅行中に書かれた。なお、「JOURNAL」48のうち1969年8月23日までは、『モンマルトル日記』に収載されている。

41. 「JOURNAL」53

1973年8月5日から1974年7月8日までの日記。日記には1973年8月14日から8月23日にかけてのイギリス旅行（旅行⑨）の記載がある。展示してあるページはこの旅行中に書かれた。なお、「JOURNAL」53のうち1973年9月1日までは、『詩への旅 詩からの旅』に収載されている。

42. 『時の終りへの旅』

1977年8月、筑摩書房より刊行。1975・76年の2年間に旅した日々に書かれた文章を集めたもの。展示してあるページは、1975年7月16日から7月26日にかけてのフランスパリーカンヌ自動車旅行（旅行⑩）中の記事である。

43. 手帳

1974年12月21日から1975年1月4日にかけてのインド旅行（旅行⑪）の際の手帳。展示してあるページは、この旅行中に書かれた。

44. 手帳

1975年7月16日から7月26日にかけてのフランスパリーカンヌ自動車旅行（旅行⑩）、1975年8月23日から8月27日にかけての西ドイツ旅行（旅行⑫）他の際の手帳。展示してあるページは、パリーカンヌ自動車旅行中に書かれた。

45. 「JOURNAL」54

1974年7月11日から1975年7月5日までの日記。日記には1974年12月21日から1975年1月4日にかけてのインド旅行（旅行⑪）、1975年3月28日から4月9日にかけてのアルジェリア・チュニジア旅行（旅行⑬）の記載がある。展示してあるページはチュニジアを旅行中に書かれた。

46. 「JOURNAL」55

1975年7月11日から1975年10月5日までの日記。日記には「ヨーロッパの旅」と表題がつけられ、7月16日から7月26日にかけてのフランスパリーカンヌ自動車旅行（旅行⑩）、8月23日から8月27日にかけての西ドイツ旅行（旅行⑫）、9月3日から9月8日にかけてのスイス、西ドイツ旅行（旅行⑭）、9月19日から10月3日にかけてのイタリア旅行（旅行⑮）の記載がある。展示してあるページは8月の西ドイツ旅行について旅行より戻って書かれた箇所である。なお、1975年7月11日から8月22日までは、「時の終りへの旅」に収載されている。

47. フランス ヌヴェルにて <写真>

1958年7月19日から8月27日にかけてのフランス・イタリア旅行（旅行①）の際の写真。写真の撮影地については、列品No.25の「JOURNAL」に見られる主な旅行地図を参照。

48. スペイン サマランカにて <写真>

1960年8月18日から9月16日にかけてのスペイン・南フランス旅行（旅行③）の際の写真。

49. インド サンチにて <写真>

1974年12月21日から1975年1月4日にかけてのインド旅行（旅行⑪）の写真。

50. チュニジア カルタゴにて <写真>

1975年3月28日から4月9日にかけてのアルジェリア・チュニジア旅行（旅行⑬）の際の写真。なお、撮影地カルタゴは、チュニジアの首都チュニス郊外の都市である。

51. フランス カマルグ地方にて <写真>

1975年7月16日から7月26日にかけてのパリーカンヌ自動車旅行（旅行⑩）の際の写真。なお、カマルグ地方はフランス南東部のローヌ河口のデルタ地帯を指している。

52. 西ドイツ フーズムにて <写真>

1975年8月23日から8月27日にかけての西ドイツ旅行（旅行⑫）の際の写真。背景は作家シュトルムの胸像である。

金澤誠寄贈資料

53. 三好達治自筆原稿

季刊誌『文體』7月第4号（スタイル社・昭和24年7月）に掲載された詩「なつかしい斜面」「けれども情緒は」「ここは東京」「いただきに煙をあげて」の自筆原稿。これらの詩は、その後、詩集『駱駝の瘤にまたがって』に収録され、昭和27年3月に創元社より刊行された。

この原稿は、前館長金澤誠氏が、当時スタイル社で編集の仕事に携わっていた関係から、昭和62年3月に同氏より寄贈を受けた。

（参考）三好達治

明治33年(1900)～昭和39年(1964)

昭和期を代表する叙情詩人。萩原朔太郎に師事し、フランス近代詩の影響を受けて叙情主義を復活させ、東洋の伝統詩の手法をとり入れた独自の境地を開いた。代表的な詩集に『測量船』『艸千里』などがある。

54. 詩集『駱駝の瘤にまたがって』

「なつかしい斜面」「けれども情緒は」「ここは東京」「いただきに煙をあげて」を収めた詩集。『三好達治全集3』（筑摩書房刊行・昭和40年12月）所収。

高橋新太郎寄贈資料

55. 昭和8年11月20日付朝日新聞号外

第一次世界大戦中・後の経済情勢の激変と、世界的な民主主義の風潮を背景として労働運動・社会運動が活発になり、大正11年(1922)にはひそかに日本共産党が結成された。社会運動の盛り上がりは、学生運動・婦人運動・部落解放運動など様々な方向にあらわれたが、一方で昭和3年(1928)3月15日には共産党員の大検挙が行なわれ（三・一五事件）、治安維持法の罰則に死刑が加えられるなど弾圧が強められていく。そして、昭和7年10月末、共産党の大手入れが行なわれ、

この頃をもって組織的な活動はほとんど終わりを告げる

この新聞は、共産党下部組織の検挙を伝える、昭和8年11月20日付の号外で、学習院出身者から多くの検挙者を出した。

昭和63年6月、学習院女子短期大学教授高橋新太郎氏より寄贈を受けた。

56. 昭和8年11月20日付東京日々新聞号外

列品N0.55と同じ内容を伝える同日付け新聞号外。高橋新太郎氏より寄贈を受けた。

学習院大学史料館スタッフ

館長 柳田節子

須田肇

生田享子

島田典子

長佐古美奈子